

第8章 総括 全体のまとめと今後の課題

本書では2001年度から13年間にわたって集められたGATBのデータを分析し、中学生、高校生から、大学、短期大学、専門学校の在學生、20歳代から60歳代の成人に関して、それぞれの職業能力の特徴と長期的な変化等について検討した結果を報告した。各章で得られた主な結果については第1章の概要において述べたので、ここでは、本書全体を通して、GATBのデータ分析からどのようなことが見いだされたのかをまとめてみたい。

8-1 GATBの適性能からみた職業能力の発達について

本書では、おおまかに中学生、高校生という中等教育課程の生徒、大学等の高等教育課程の學生、成人というグループに分けてGATBを素材として測定された職業能力について検討を行った。成人に関しては、加齢と職業適性との関連ということで主に中高年齢者に焦点をあてて分析したので、この部分は後述するとして、まずは中学生から大学生等に到る若年者についての職業適性の発達を考えてみたい。

発達という観点から考えると、10代前半から20代前半に向けては学校教育においても社会的経験においても様々な刺激を受ける時期であり、心身ともに大きく成長する時期であるので、能力に関しても年齢とともに高まっていくことが考えられる。

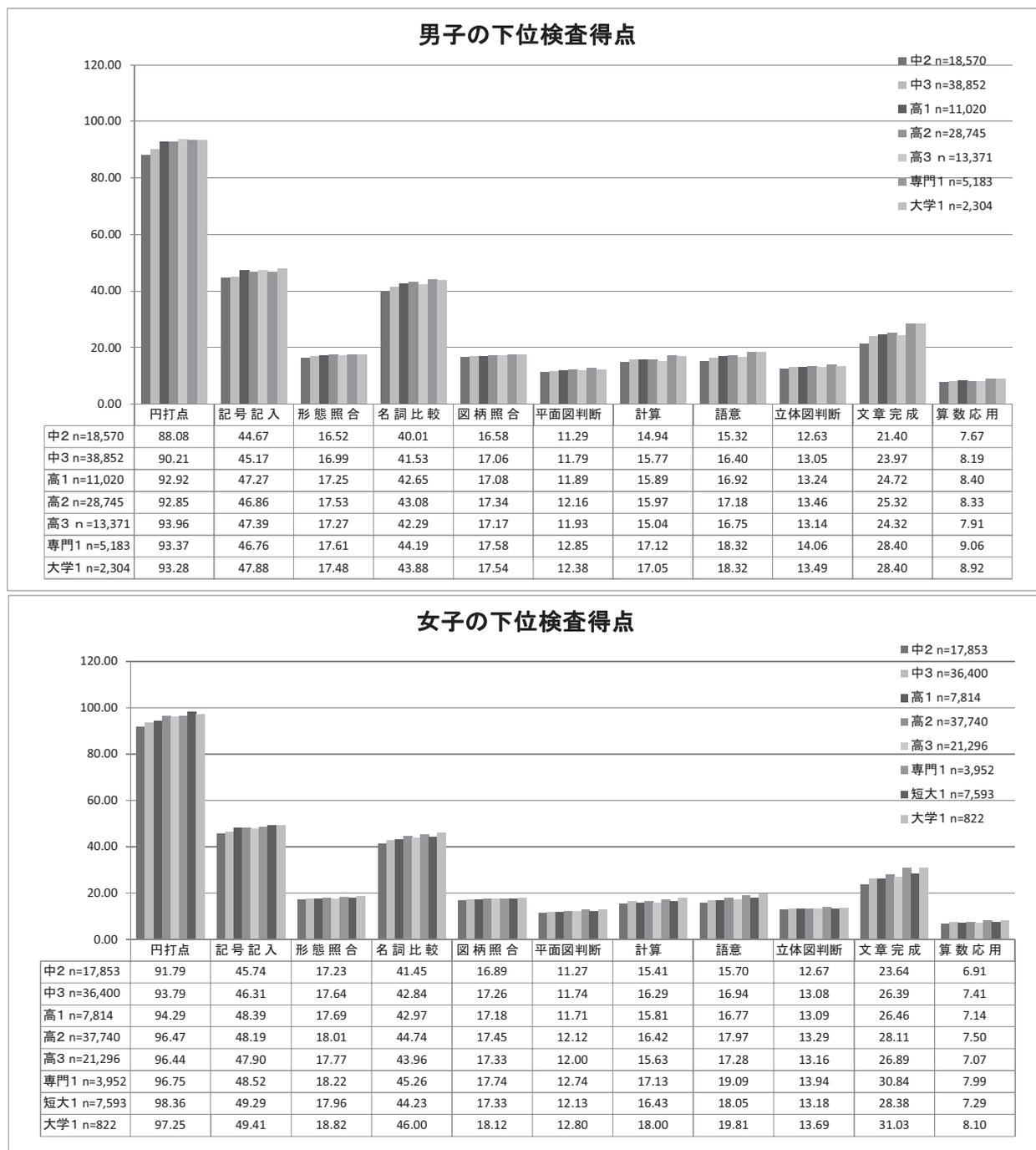
GATB（進路指導・職業指導用）は、中学生から40歳代前半程度の者まで適用することができ、下位検査は同じものを用いるので、粗点に関しては中学生から大学生までの得点の比較が可能である。他方、適性能得点に関しては、中学生と高校生以上では換算基準が異なるので、中学生から大学生までを通した比較はできない。

そこで、若年期における年齢と職業能力との関連をみるため、中学校から大学までの各学校種の下位検査の平均値を男女別にグラフにした（図表8-1）。グラフの作成にあたり、中学生については中2、中3、高校生については高1、高2、高3の平均値を用いている。また、専門学校生、短大生、大学生については学年間の人数が不均衡であったため1年生のみのデータを用いた。

下位検査の平均値をみると、男女どちらのグラフをみても、中学生については中2よりも中3の得点が高い。高校生については学年と得点の伸びに一定の関係はみられない。ただ、中3に比べて高校生の得点の水準をみてみるといくつかの例外はあるが、全般に高くなっていることがわかる。また、専門学校生、短大生、大学生はすべて1年生の得点であるが、男女ともに高校生よりも高めの得点が見られる検査が多くなっている。

このように、中学生、高校生、大学等の高等教育課程という時期においては、教育課程の区切りに関して、GATBの下位検査で測定される能力面に関する水準も少しずつ高くなっていくことが確認された。

図表 8-1 中学生、高校生、大学、短大、専門学校生の下位検査の平均値（年度こみ）



他方、グラフにおいて各検査での対象グループ間の得点の差に注目すると、検査によって得点の変化が比較的大きなものと変化が少ないものがあることが見て取れる。検査毎に問題の内容、形式、問題数が異なるので、検査間での比較はできないが、中2から中3、高校生、専門学校生等の高等教育課程在学者という括りでの変化をみたときに、例えば、文章完成、語意、名詞比較などの言語能力や計算など認知機能に関連する下位検査の方が、形態照合、

図柄照合、平面図判断、立体図判断など知覚機能に関連する下位検査に比べて中学生から上の年齢層までの得点の増加の幅が大きいようである。このことから、14歳～18歳くらいまでの青年期前期には、言語能力や数理能力のような認知機能については大きく発達するが、空間判断力や形態知覚のような知覚機能についてはそれほど大きな変化がみられないということも考えられる。ただ、本研究で扱ったデータに関しては、各章で記述したように、サンプル数のばらつきや地域限定のデータであることなど様々な限界があるので、この傾向が能力の発達に関する一般的な知見として導き出されるかどうかについては、別途、検証が必要であろう。

以上が若年者に関する職業能力の変化であるが、若年期では能力の水準が年齢とともに高くなるという方向で発達が進むのに対し、中高年齢者に関しては能力の減衰の有無や、年齢によらず維持される能力、年齢とともに衰える能力の識別という観点から職業能力の変化を考える必要がある。

20歳代から60歳代までの段階の成人について、GATBで測定された適性能の得点の水準からみると、特に中高年齢期となる50歳代や60歳代以降で、加齢とともに適性能得点が低くなる傾向がみられ、この結果は、GATBを用いた過去の研究結果とも一致していた。ただし、すべての適性能の得点が下降するのではなく、加齢の影響を受けやすい適性能もあれば、加齢の影響を受けにくい適性能もあることが示された。年齢が高くなってもそれまでと比較して得点の低下が少ない適性能は、数理能力(N)や運動共応(K)であった。一方で、特に50歳代、60歳代以降、加齢の影響を受けやすい適性能は形態知覚(P)や書記的知覚(Q)であった。

以上のことから、加齢にともなう職業能力の変化という点を発達的な観点からみると、40歳代までに比べて50歳代、60歳代以降に一部の適性能の水準が下降する傾向があることは確かなようである。ただし、これはGATBという時間制限内での作業量を問題とする検査を用いて測定された適性能に関して限定的に確認された結果であること、加えて、中高年齢者の場合には、過去の職業経験などを含めた個人差の影響も大きいともいわれているので、中高年齢期以降、すべての人がどのような職業の遂行も難しくなるということではない。また、身体的な老化ということから加齢の影響を受ける能力があるとしても、過去の経験を活かして影響を受けにくい能力を使うような職種を選んだり、加齢の影響を軽減できるような条件を検討したりすることで、就業を継続することは可能であると考えられる。

8-2 従来と比較したときの近年の職業能力の特徴と変化について

近年の職業能力の特徴としては、前述の通り、若年者に関してみると、書記的知覚(Q)や形態知覚(P)が高くなっていることが挙げられる。これは中学生、高校生のほか、大学、短大、専門学校生でも同様にみられた共通の特徴であった。また、数理能力(N)や空間判

断力（S）については全体に低めの傾向があり、特に空間判断力（S）は経年的に下降傾向がみられた。運動共応（K）も低めに推移している適性能であるが、これは得点のばらつきが大きいことや学科によっては高くなるものもあるので、若年者全般において低い傾向を示すと言い切ることは難しい。なお、以前と比較した場合、若年者データに関して特定の適性能の得点が高くなったり、低くなったりしている明確な理由については本研究のデータでは明らかにすることができない。

他方、本研究では、現在用いている GATB の換算規準の適切さについての検証も関心の 1 つであった。これは現在の GATB が用いている 1983 年に作られた当時の換算基準を現在のデータに適用してその水準や変化の傾向をみるという方法で検討されたが、結論からいえば、現在の換算表の適用を見直すほどの大きな問題点は現時点ではみられないということになる。ただし、いくつかの適性能については、長期的にみた得点の推移に関して気がかりな点もあった。例えば、上述の通り、特に高校生、短大生、専門学校生などについて、数理能力（N）、空間判断力（S）などの低下傾向が見られた点である。適性能得点に関しては、最終的には評価段階の記号に置き換えられて、適性職業群との照合に用いられるため、これらの適性能に関して平均より低い評価段階になる者の割合が多くなってしまふのは、受検者本人にとって不利になる可能性もあることを考えると、今後とも注意してみていく必要がある。

8-3 GATB が果たす役割と今後の課題

第 2 章の最後にアメリカでの GATB の近年の動向について触れたが、GATB そのものがほとんど用いられなくなり、職業能力の評価が他の方法に置き換えられているアメリカに対して、日本においては戦後から今日に到るまで GATB は教育や職業相談などの様々な場面で継続して活用されてきた。長期的な傾向でみると、GATB の場合、検査の実施や実施後の処理に時間と手間がかかるため、公共職業安定所等の職業紹介・職業相談施設では、若年者向けのセミナーなどでの実施など限定的な活用であることが多くなっているし、高等学校への進学率が高くなった今日では中学校での実施も減少傾向にある。その一方で、GATB の進路指導・職業指導用については、第 5 章でも述べたように、高等教育課程への進学者の増加を背景として、中学校、高等学校の学卒者向けの実施に限らず、大学、短大、専門学校等での就職支援に向けた活用も見られるし、若年者に対する職業相談機関において、就職に対して何らかの困難性を抱える若者に対する相談場面での実施も見られるようになっている。近年、就職に関する採用や学校での進路指導を目的として多くの検査が開発されているが、GATB のように長期にわたる利用実績があり、なおかつ様々な職業の遂行に関する基礎的な能力を 9 つの適性能という多面的な観点から正確に測定することができる検査は他にないことが活用の広がりにつながっていると推察される。自らの職業能力を他の人と比較したとき、どのよ

うな点に特徴があり、それぞれの能力がどの程度の水準にあるのかを知ることは、個人の職業選択に向けた重要な判断材料となり得る。職業経験がないために、様々な職種に対する自らの職業能力の水準に関する判断材料をほとんど持たない若年者や、職業能力に及ぼす加齢の影響を懸念する中高年齢者に対する相談場面において、GATBの結果は有効な資料として活用することができるだろう。

他方、GATBの有用性を今後も維持し、活用し続けていくためには、検査そのものの信頼性について定期的に確かめていく作業が不可欠である。現時点においては、職業能力を測定する検査としてのGATBの精度という点からみて、本研究で得られた結果はGATBが信頼性の高い安定した検査であることを裏付けるものとなった。すなわち、本研究で分析したGATBの得点には長期的にみてもそれほど大きな変動がなく、発達の観点、性差、学科や専門性との関連からも妥当な結果が見いだされている。このように、職業能力を正確に測定できるという点でGATBが大変すぐれた検査であることは確かであるので、将来に向けても、定期的に規準の確認を行い、信頼性と妥当性を維持していく必要がある。ただ、その場合に問題となるのは、改訂時におけるデータ収集のあり方である。近年の改訂の際にもいえることであるが、改訂の度に検査のデータを偏りなく大量に集めることは容易なことではない。そこで、今後もデータ収集の方法については、様々な工夫をしなければならないことが予想される。例えば、検査の妥当性の検証には、サンプルを限定して専門性と適性との関連をみるといった小規模調査等をあわせて実施していくような方法についても検討していく必要があるだろう。

最後になるが、若年者から中高年齢者を対象として、13年間という長期にわたる職業能力の変化と特徴を捉えるという研究の目的に照らしてみると、今回のデータの分析の結果は、手引改訂の際に集められた既存のデータを用いて検討を行っているため、学部や学科の情報が欠如していたこと、構成人数が不均衡であることなどのデータ上の制約を受けていることは否定できない。そのため、得られた結果については、職業能力の様相に関する一般的な知見というよりも、各対象者のGATBの適性能の水準に関する解釈のための1つの資料という位置づけに留めざるをえない。しかしながら、同一の検査を用いて幅広い対象者に対して集められた長期的なデータを用いて、職業能力に関して実証的に検討されているという点では資料的な価値があると考えられる。また、本研究で得られたいくつかの知見は、職業能力に関する過去の研究知見と一致した結果を示していることから、これらの結果に基づいて新たな問題設定を行い、職業能力に関する研究を進めていくことができるのではないだろうか。その点については今後の課題としたい。

JILPT 資料シリーズ No.169

職業能力の評価 — GATBを用いた13年間のデータの検討 —

発行年月日 2016年5月31日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL：03-5991-5104

印刷・製本 大東印刷工業株式会社

© 2016 JILPT

* 資料シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)